

# 日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館〉

第10号 1993年12月1日

## 昔話と若者たち

高木 啓夫

ある奥山深くの一軒家に老夫婦がひっそりと住んでいた。平家の落人の一族だと語る色白の老主人には心なしか気品のただよっているように思われたが、八十年の齢をすぎた労苦は足膝の痛みを訴えていた。そして、その脇に黙然として座している老妻の目の病を気づかれないながら、「山を買ってくれる人はいませんか」と身を乗り出してきた。山を下ったわたしは、ある大手の材木商の知人に相談を持ちかけたが、話は進展しそうで、しないままに終わってしまった。

昭和三十年代までは植林の全盛期で、山持ちという言葉は、いわば長者の代名詞でもあった。その長者の宝は今では遺物的な存在となり、長者の夢は自らの労苦とは別次元の見えざる魔力によって消されていった。

昔話の長者譚には没落してゆく長者と成長してゆく長者とがある。観音様のお告げによってつかんだ一本の薬しべに蛇をくくりつけたのを泣く兒にやって蜜柑をもらい、それを渴望する呉服屋にやって反物をもらおうという具合に、与える度により大きなものを得

ていく「薬しべ長者」は成長してゆく長者である。

柳田国男は「薬しべは宝物でも何でもない。単に神霊の思しめしに叶うた男には、斯程はかない品でも、なほ立身の有力な武器になる」と述べて、その神霊は観音様でもあり、蛇や蜂や蜻蛉など「小さな羽蟲の隠れた力であったことはほぼ明らかである」と、それは大動物よりももっと古いものでなかつたかと述べておられる（昔話と文学）。

老夫妻の宝の山に心傷めていたころ、若者たちに薬しべ長者を語りかけてみた。若者たちは得た品物を次々と交換してゆく語りには興味を示す。男の所持する品物を必要とする者との出逢いには不自然な好都合さを感じながらも、宝物でも何でもない物が、場所により時により相応の価値を発揮することは、彼らの生活の中からも感得するところがあるらしい。しかし、度重ねてゆく薬しべ長者の施しから得る品々を、人助けによる恵みとするには相当な拒絶反応を示す。まして「神霊の思しめしに叶うた男」であるからこそ、長者に

なるべき条件を得たとか、蛇や蜂の精霊のなさしめるわざであったと解説するに至っては興醒めの様態となつてしまった。

思えば、わたしの少年のころには、季節に花咲き乱れ、蝶の舞い乱れ、夕陽を浴びた赤蜻蛉が虚空一面に溢れ、その中を鬼蜻蛉が雄然ととび交い、駆けゆく足元からは大きな蛇の躍り出る山野の自然であった。その後のわたしの民俗事象の理解には、そうした自然の中の営みが潜在していることに気づくことが数多い。

しかし、羽蟲を身近に見ることもめつきり少なくなつてしまつた現今の若者たちは、小さな虫との思い出や不可思議な生態など見ようはずもない。そこに持ち出した虫の精霊話は、彼らの脳裏には広がりようがなかつたのである。このことは薬しべ長者譚の根源にかかわる虫の精霊話は、いずれ忘れられてしまうことを暗示しているように思えてならないのである。昔話の採話困難という状況は、これに拍車を更にかけることにならう。これは昔話の世界だけでなく、日本の民俗、民俗学も昔語りを忘却しつつ変容することでもある。奥山の宝の山が、その価値を失つたように。

※

# 企画展 土佐の古墳を掘る 特別企画新発見の銅剣

## 土佐の古墳発掘史をめぐって

岡本 桂典

古墳とは、高い盛土をもつ古代の墓をいい、高塚とも呼ばれた。古墳時代は、古墳が権力の象徴として出現した時代である。その時代は、弥生時代につづく三世紀後半より七世紀にいたる間を指しているが、特に古墳時代がいつから始まるのか、あるいは古墳時代の概念にも諸説がある。

さて、土佐における古墳の研究は、江戸時代に始まる。藩政末期から一八八七年にかけて活躍したのが、松野尾章行である。彼は、郷土史研究の中で、古墳や須恵器について『皆山集』や

『翠軒抄録』に記録を残している。

明治から大正にかけての動向をみると、寺石正路が明治二十一年（一八八八）、「土佐國長岡諸村塚穴」を『東京人類學雜誌』二四号に発表している。第一回は、寺石正路の研究ノートに書かれた長岡郡介良（現高知市介良）の古墳から出土した須恵器のスケッチである。このノートは、寺石自身が全国を遊学した時にスケッチした『考古学ノート』と考えられる。明治三三年（一九〇〇）には、東京帝國大學編の『古墳横穴及同時代遺物発見地名表』

が刊行され、土佐国として七郡四箇所古墳が地名表として掲載されている。大正元年（一九一〇）昭和十年（一九三五）まで、高知県の考古学界のリーダーとして武市佐一郎が活躍した。彼は、「土佐の古墳」（『土佐史談』七）、「土佐の古墳補遺」（『土佐史談』十）、「土佐の古墳の分布」（『土佐史談』五一）などの論文を势力的に発表した。

昭和五年（一九三〇）には、現高知市朝倉古墳の保存のために、朝倉村内

の青年団が古墳保存のために通路の改修・説明板の設置などを行ったことが『高知新聞』十一月四日付に掲載されている。現在の朝倉古墳の現状をみればこの保存活動も化石化しつつあることが伺える。昭和十五年（一九四〇）には、現在の南国市明見彦山三号墳が偶然に発見された。このことは、『高知新聞』四月二十八日付に掲載されている。当時の発見者は、県立農業学校武田宗久教諭（現千葉県在住）に連絡し、石室内の出土状態を写真で記録している。（この貴重な写真は八頁にも掲載した。）

第二次世界大戦以後には、他の時代の遺跡と同様に古墳の調査も徐々に増



寺石正路のスケッチした『考古学ノート』より



南国市明見彦山3号墳出土状況〈昭和15年(1940)撮影〉



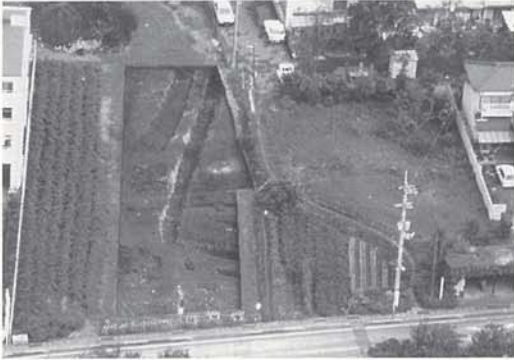
南国市舟岩2号墳横穴式石室〈昭和42年(1967)撮影〉





南国市小蓮古墳（円墳）〈昭和47年(1972)撮影〉

加していった。それらの調査は、主に岡本健児・故廣田典夫の手で行なわれた。南国市舟岩古墳群は、県下最大の古墳群で二二基の古墳のうち一二基が昭和四二年（一九六七）に調査された。舟岩古墳群は、六世紀中葉〜七世紀初頭の古墳群である。現在は、少数の古墳が残っているにすぎない。本発掘は、三次にわたって調査が行なわれ、現在では考えられないほどの短期間で年末及び正月返上で行なわれた発掘調査であった。昭和四七年（一九七二）南国市小蓮古墳が調査された。古墳の墳丘は、二段になった円墳で、盗掘を受けていたが、金環・金銅中空玉・刀子・馬具などが出土した。この当時の遺物



土佐山田町伏原大塚古墳空撮

整理は、自宅に持ち帰り、実測や拓本写真撮影をするという全く個人の努力による整理作業であった。これらの古墳の他に高知市高岡原山古墳群や南国市久礼田高松古墳などの調査が行なわれた。南国市田村遺跡群発掘調査以後の調査体制確立後の発掘調査には、宿毛市高岡山古墳群・南国市口ミノヲ谷古墳・南国市蔵本二号墳、そして野市町大谷古墳や近年行なわれ、埴輪が出土した土佐山田町伏原大塚古墳の調査などがある。口ミノヲ谷古墳は、南国市領石にある。一八九七年のウイリアム・ゴーランド著『日本のドルメン並高塚』に領石に三基の古墳があったことが記されている。この古墳の報告は、著名な地質学者ナウマンが現地入りし、



伏原大塚古墳出土円筒埴輪

ゴーランドに報告したものである。大谷古墳は県教委が調査し、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが整理を委託された古墳で、現在は移築され保存されている。近年の発掘調査で注目されたのは、土佐山田町伏原大塚古墳の調査である。本古墳は、故廣田典夫によりかつて調査され、その古墳の形態や埋葬施設、出土遺物に県内初の埴輪が存在することなどで注目された古墳である。その古墳の調査が、ご子息の手で父の意志をつぐかたちで行なわれた。古墳全体の調査は、行なわれなかったものの、方形の周溝が発見され、周溝から大量の須恵器系の円筒埴輪が出土し、初めて土佐の埴輪の一部が明らかにされた。方形の周溝の存在によ

り本古墳は方墳とされ、その時期は六世紀中葉とされている。さらに、古墳からは中世の火葬墓や火葬場とおもわれる施設も確認されており、県内における中世の葬送儀礼の様相が初めて明らかにされてもいる。

土佐における前期古墳とされるものには、宿毛市高岡山古墳群・曾我山古墳、南国市狭間古墳がある。古墳時代後期には、高知平野に横穴式石室をもつ古墳が集中してくる。今後、開発により、新たに古墳の発見される可能性が多くなり、土佐の古墳の様相がより明らかにされていくであろう。しかし、過去の開墾により多くの古墳が消滅していることも事実である。今後は、古墳の研究史も加味した古墳の調査が重要視されてくるであろう。今回の企画展では、その意味も含め土佐の古墳の考古学的な面にも重点を置き、展示を構成している。土佐の古墳時代の様相については、現在まで論じられたものは、ほとんどみられない。今後は、古墳時代の住居跡との関連や古墳の築造の背景についての研究が学史を踏まえて課題として残っている（本文の敬称は略させて頂きました）。

今回の展示では、特別企画として野市町で発見された絵画を描いた銅剣を展示、初公開します。その絵物語りを銅剣をとおしてご覧頂けると幸いです。



# 『横田辰五郎日記』にみる堺事件

野本 亮

新しい時代の胎動が、たしかに聞こえはじめた一八六八年の二月、フランスとの間に極めて厄介な外交問題が発生した。堺港付近の測量のため展開していた仏軍水兵の小部隊と、前年十二月八日に山内容堂の警護隊として入京し、堺警備にまわされていた扈從隊（箕浦・西村隊）が交戦し、仏側に十一名の死者がでたのだ。世にいう『堺事件』である。事件後、東征のため京都・大阪を空にしていた新政府は、外国との関係を悪化させないため、厳しい処分を土佐藩に要求した。その結果、二十名が処刑の対象となり、六番隊長箕浦猪之吉ら十一名が切腹。仏側検死役（ベルガス・デュ・プーチートゥール）の指示により命を救われた残りの九名は、解任の上、流罪と決定した。生き残りの一人、横田辰五郎は、警備隊の兵士として当然のことをしただけであるのに、一方的に下された処分には納得がゆかず、また、あまりにも冷たい藩庁の仕打ち（中村入田村の日当たりの悪い場所に置かれたので肺を病む者が続出した）に憤慨し、己と仲間の名譽のために、一冊の書を著した。すなわち、『横田辰五郎日記』（堺表土佐藩

士攘夷記）である。横田は、自らの書に、より具体性をもたせるため、幾つかの絵図を付した。『土佐藩士発砲の



『横田辰五郎日記』宇賀四郎氏蔵 写真 高知市文化振興事業団提供

場面』や『妙国寺切腹の場面』等である。これらの絵図には様々な歴史の断面が描かれていて興味深い。

土佐兵は、容堂の微妙な政治姿勢のため、薩長に比べると部隊の編成や、装備の充足率が不十分であったというが、一応揃いの軍装（上衣・軍袴・脚絆・草鞋）と武器（着剣先込め施条銃ライフル）を持っていたことがわかる。（ただし、東征軍は別）画面には、全部で四十名の兵士が描かれている。上下紺中白の手旗を振っているのが恐らく両隊の隊長であろう。さらに、父とともに儒学をもって藩に仕え、容堂の侍読も努めた箕浦は、徹底した攘夷論者であったので、この時、血気にはやって陣頭指揮をとったと思われ、六番隊長が最前列にあることも考え併せれば、中央の前列にいる陣羽織姿の将校が彼である可能性が高い。

画面の下には、驚口を持った民間人らしき者が三人ほど見えている。外国事務局判事五代才助らの仏兵死体調査によると、銃創の他に鋭利な切傷が記されており、彼らも戦闘に参加していたことがわかっていいる。彼らは、幕府崩壊に伴い消滅した町奉行所にかわり、堺の行政立てなおしのため採用された元奉行所同心や町火消し（黨）であったという。土佐藩の主力は東征に加わっていたため、銃卒以外の要員は、

地元で採用するしかなかったのである。画面左には、滑稽なまでにぶざまに描かれている仏軍水兵の姿があるが、ほとんど丸腰の状態で、至近距離から撃たれている様子を見ると、何とも悲惨な感じがする。佐々木甲象ら日本側の文献には、仏側のピストルによる応戦が書かれているが、これを見る限りそんな余裕はなさそうである。仏軍の戦死者はいずれも若い徴集兵が多く、彼らのほとんどは、前年の十二月七日より、堺は外国人遊歩区域になっていたため、多少の違法行為（砲台の偵察等）をしても、さほど危険はないと考えていたようである。しかし、箕浦らの、悲壮な決意をもって警備にあっていた者からみれば、これは許しがたい侵略行為であり、天誅を加えることに些かの躊躇もなかった。このギャップが重大な悲劇を引き起こした要因の一つといえるかもしれない。

さて、今回展示する本資料は、横田辰五郎と姻戚関係にあった宇賀家に代々所蔵されてきたもので、格別のご配慮により門外に出ることになった。

常設展企画コーナーにおいて、他の関係資料とともに十二月九日から平成六年三月三十一日まで（ただし、横田辰五郎日記は平成六年一月十五日まで）展示する。

史料紹介

城下町家扣(五)

吉村 淑甫

蓮池町筋南側分

(表口) (裏行)

西表	式間	九間半	萬屋 悦太郎
右同	八間	七間	年美 銀次郎
右同	三間	七間	備後 銀兵衛
北表角	三間半	七間	備後 銀兵衛
北表	三間半	七間	甘後屋 鏡藏
右同	式間半	拾八間	村重 善太郎
右同	式間半	式拾間	右同人
右同	三間	式拾間	樽屋 伝次
右同	式間	式拾間	橋本屋 庄吾
右同	三間半	式拾間	新町庄屋屋敷
右同	五間半	式拾間	嶋崎源四郎
右同	四間半	式拾間	掛屋 龜助
北表	四間半	九間	右同人
右同	三間半	式拾間	田内喜參次
右同	三間半	式拾間	小野 禎順
右同	拾間	式拾間	門田 作吾
右同角	四間	式拾間	三宮 達助
西表	拾間	七間	橋本屋 庄吾
右同	卷間	七間	定御小者 平八
北表角	三間半	九間	右同人
北表	三間半	九間	山内太郎左衛門殿家系 宮川 安平
			魚壳 次平

右同	三間半	式拾間	一園嘉平次
右同	三間半	式拾間	中尾 順碩
右同	四間	式拾間	柳橋須右衛門
右同	三間五尺	式拾間	山下並右衛門
右同	六間一尺三寸	式拾間	北村喜四郎
右同	式間四尺八寸七步五厘	式拾間	掛屋 達次
右同	式間四尺八寸七步五厘	式拾間	八輪屋 吉平
右同	式間	式拾間	田村屋 岩八
右同	三間半	式拾間	樽屋 長藏
右同	三間半	式拾間	他支配屋敷 直五郎
右同	式間半	式拾間	定御小者 楠次
右同	四間	九間半	香屋 馬太郎
北表	四間	式拾間	足輕類 順七
北表角	三間	式拾間	木屋 助治
右同角	三間	式拾間	右同人
北表	三間半	式拾間	五百人方圓藏
右同	三間半	式拾間	下代類 吉次
右同	三間半	式拾間	他支配屋敷 駒太
右同	三間半	式拾間	志和武平太
右同	三間半	式拾間	甲藤 廣平
右同	三間半	式拾間	志和武平太
右同	三間半	式拾間	志和武平太
右同	三間半	式拾間	右同人
右同	三間半	式拾間	岸本 鏡次

右同	七間	式拾間	傍士 安平
右同	三間半	式拾間	池内 又八
右同	三間半	式拾間	定御小者 瀧次
右同	三間半	式拾間	定御小者 瀧次
右同角	七間	式拾間	大津屋 權次
西表	卷間四尺零寸五步	六間半	油屋 直助
右同	三間五尺三寸	六間半	大工 專平
右同	式間半	六間半	油屋 直助
右同	三間半	六間半	油屋 與右衛門
右同	式間半	六間半	吉村 來平
右同	式間半	六間半	木屋 虎吉
南表	式間	六間	大工 久万八
南表	式間半	六間	吉村 來平
右同	八間	式拾間	知藏 四良兵衛
右同	三間	式拾間	志和武平太
右同	三間半	式拾間	志和武平太
右同	七間	式拾間	金 剛院
右同	三間半	式拾間	細川潤次郎
右同	三間半	拾六間	大田屋 喜平
南表	式間半	式拾間	川鹽 六三郎
右同	式間半	式拾間	大工 兼右衛門
右同	三間	式拾間	虎屋 恒五郎
右同	三間半	式拾間	掛屋 龜助
右同	五間	式拾間	備後 助三郎
右同	三間	拾間	大工 久米吉





# ニュース

## 天皇・皇后両陛下ご来館

地方事情ご視察のためご来高の天皇・皇后両陛下が十一月十日（水）ご来館されました。両陛下のお車が到着されるとお迎えの列から大きな歓声があがりました。

吉村館長の案内で各展示室をまわられ、民俗展示室では田の神「オサバイ」に興味をお持ちになられたご様子で、総合展示室では皇后さまが正倉院に伝わった「絶大幡芯裂」の鮮やかな色彩に感心なさっていました。企画展「土佐の肖像画」もご覧になり、約一時間ご観覧されました。



民俗展示室をご覧になる両陛下

## 企画展示室から

### 「土佐の肖像画」

○平成五年十月三十日から十一月二十三日まで。

「我が妻も画にかきとらむ暇もが旅行く吾れは見つづ唄ばむ」という防人の歌が「万葉集」にあることからみても、特定の人物の容貌を造形しようとする願望は、かなり古くからあったと思われる。

平安鎌倉時代にかけての大和絵の肖像画のことを似絵という。後世に遺そうとする人物の画像を在りし日の容貌に似せて描くことからこの名がついた。この古い伝統は近世にも引き継がれたが、この似絵や頂相（中国から伝来した禅僧の肖像画）とも違う新しい画法がみだされていった近世にこそ、注目すべき作品が多々ある。

今回の企画展では、高知県内に現存する近世の肖像画を一堂に集めた。

狩野派の作とみられる重要文化財、長宗我部元親像を筆頭に、山内一豊と見性院の夫婦像。写實的に描かれた一豊の実弟山内康豊像。康豊の嫡子で二代藩主の山内忠義像。幕末四賢公の一人、十五代藩主山内豊信（容堂）像。

黒田清輝作、土佐藩最後の藩主山内豊範像。正統派の武市瑞山、写實的な中岡慎太郎、イラストタッチの坂本龍馬

の志士像。幕末の学者・文人では、「万葉集古義」でおなじみの鹿持雅澄像、陽明学者奥宮健齋像、篆刻家壬生水石像、砲術家の徳弘董齋像など。また、文化・文政期の文人群像を写真パネル化したものを併せ、肖像画二十一点、写真パネル三十五点という内容である。土佐の肖像画は、その絶対数が少ないため、特定の個人・団体からの集中借用となり、ご迷惑をおかけしたが、ご好意のかいあって、肖像画同士の魅力が重なりあい、影響しあって独特のムードが漂う企画展となった。



「土佐の肖像画」展示風景

## 〈史跡巡り〉

十月十日（日）に、室戸市佐喜浜へ俄と獅子舞を見学に行きました。行きバスでは、祭りの全体の手順をビデオで予習。俄に爆笑、獅子の芸に息をのみました。杉本秀九郎さんをはじめとする保存会の皆様、どうも有難うございました。



佐喜浜の獅子

## 〔歴民館日録〕

月日	出来事
一〇月九日	子ども歴史教室「土佐の古代を歩く」
一〇月一〇日	第二回史跡巡り「佐喜浜の俄と暴れ獅子」
一〇月三〇日	企画展「土佐の肖像画」開幕
二月六日	民俗展示室企画コーナー「船大工の道具箱」開始
二月一〇日	天皇・皇后両陛下ご視察
二月三日	子ども歴史教室「岡豊城たんけん」（雨天のため中止）
二月三日	企画展開幕



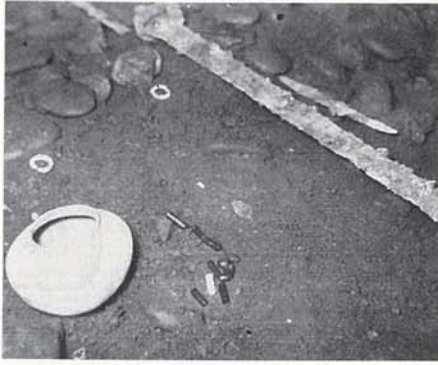
〔企画展の案内〕

土佐の古墳を掘る

特別企画新発見の銅剣

平成六年一月二二(土)から三月二七日(日)まで一階企画展示室で開催します。県内で発掘された古墳から出土した遺物や発掘当時の写真パネルなどで土佐の古墳を紹介します。特に土佐山田町伏原大塚古墳から出土した円筒埴輪や須恵器、他に南国市舟岩古墳群、高知市塚の原古墳などから出土した遺物も展示します。また、特別企画として野市町で新たに発見された銅剣や他の青銅器も展示します。

入館料は、大人四〇〇円・中高校生一五〇円・小学生五〇円(常設展示込み)です。



南国市明見彦山三号墳遺物出土状況(昭和15年(1940)撮影)

講演会

第一回  
日時 平成六年一月二九日(土曜日)  
午後二時〜四時まで

「土佐の古墳の諸問題」

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査第一係長 山本 哲也氏

第二回  
日時 平成六年二月一九日(土曜日)  
午後二時〜四時まで

「土佐山田町伏原大塚古墳の発掘調査」

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター主任調査員 廣田 佳久氏

特別講演会

日時 平成六年三月五日(土曜日)  
午後二時〜四時まで

「土佐の銅剣」

高松短期大学教授 岡本 健児氏

※講演会は入場無料で定員は八〇名です。講演会聴講希望の方は、各講演会開催の一週間前までに御希望の講演会・講演日・住所・氏名・電話番号を御記入の上、葉書にてお申込み下さい。

●子ども歴史教室

「土佐の古墳を掘る・特別企画新発見の銅剣」の展示を解説いたします。

日時 平成六年二月二二日(土曜日)

午前一〇時〜一一時

場所 企画展示室

定員 約三〇名

〈利用案内〉

開館時間 午前9時〜午後5時

(入館は、午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日)にあたる場合は火曜日(12月28日〜1月4日)

入館料 一般・400円/中学生・150円/小学生

〔常設展示〕生・50円

団体(20人以上) 別引きあり

(療育手帳・身体障害者1・2級)手帳所持者とその介護者、高知県長寿

手帳所持者は無料。毎月第2土曜日は小中高生は無料)

交通機関

高知市中心部から車で約20分。

駐車場(大型バス4台・普通車50台)あり。バスを利用する場合は次のとおり。

〔公共交通〕 船岡南団地発歴民館行き終点下車(歴民館入口)下車。

(徒歩5〜10分で資料館へ)

〔土電〕 新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。(徒歩10〜15分で資料館へ)

〔図録販売中〕

◇「土佐 古絵図展―描かれた土地の歴史―」展示解説図録  
頒価七〇〇円 送料一冊二四〇円

頁数二九頁(カラー) 残部僅少。

◇「鯨の郷・土佐くじらをめぐる文化史」展示解説図録  
頒価一、〇〇〇円 送料一冊三〇〇円

頁数八八頁、残部僅少。

○「常設展示案内図録」  
頒価一、五〇〇円 送料一冊三〇〇円

オールカラーで、総合展示室と民俗展示室の代表的な資料を紹介する。

※二冊以上のご注文はお問合せ下さい。

〈ひとこと〉

この度、平井収二郎・西山志澄の御子孫の方から関係史料の寄託を受けました。一部は、来春開催予定の坂本龍馬展で紹介いたします。

(下村)

新聞で発表した野市町の銅剣を今回企画展で特別に公開致します。

(岡本)

民俗企画コーナーで「船大工の道具箱」を来年3月9日まで開催中です。

(中村)

平成五年二月一日

編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒780 南国市岡豊町八幡1099-1

TEL 0888-621221

FAX 0888-621210